

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.041; さいごに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1582

さいごに

小長谷有紀

モンゴル遊牧社会の研究とりわけ近代化をめぐる研究にとって、モンゴル国アルハンガイ県イフ・タミル郡は特別の位置を占めている。なぜなら、社会主義化が進展する以前の1930年代に旧ソ連の地理学者シムコフによって詳細な調査がおこなわれており、そこでの移動や宿营地集団の実態を把握することができるからである。そしてまたこの地には「輝ける道」と呼ばれるネグデル（牧畜協同組合）が誕生し、社会主義化を率先するモデルケースとして成長した。この注目すべき地域に生まれ、社会主義以前を自身の体験として熟知し、かつ社会主義化をみずから担った男であるミンジュール氏を私が初めて訪れたのは、1999年の秋のことであった。

ミンジュール氏は当時すでに86歳であったが、心身ともに健やかで、言語は明快このうえない。微妙な表現から真実を探り出すには、聞き取りながらメモをするだけではいかにも不十分に感じられた。そして何よりもこれほど明瞭に過去を語る役者はそうざらにはいるまい。ミンジュール氏のお宅を辞するときから、ぜひとも彼の語りの全体をビデオ映像に取めておきたいと願うようになった。

そこで「モンゴルにとって20世紀とは何であったか」という問いを立て、その問いの答えを探しもとめてゆく形で、人びとの証言を映像に取めるというプロジェクトを企画した。国立民族学博物館から映像記録スタッフに同行していただき、インタビューを完全収録するとともに、関連する現状を撮影し、ビデオ番組を作成するという企画である。インタビューの筆頭はもちろんミンジュール氏にはかならない。

ミンジュール氏は、草原に存在していた遊牧民の暮らしを大きく転換してゆくことに直接的に関わった人物である。そして、そうした草原の変化は都市と結びつくことによって推進された。都市は、草原に生まれる人を続々と吸収し、草原から運ばれる家畜を次々と消費し、草原で産出される畜産物を営々と加工した。草原の富を吸収して成長した都市を造ることに大きな役割を果たしたのがダムディン氏である。一方、草原にはかつて存在しなかったものも作られてゆく。それが国营農場であり、大規模農耕の始まりである。これについては現在も国会議員であるゴンガードルジ氏が歴史を証言する役割を引き受けてくださった。

草原の国モンゴルを変えてきた主役はこうしてそろった。彼らが社会主義の光を語る人びとだとすれば、その陰を語る人も必要であろう。社会主義に光をあてる人びとは、往々にして今日の民主化を否定的に捉えがちである。当然ながら、社会主義化に光をあてるあまり、その放棄である民主化は、どうしても陰影と化してしまうのである。そこで、逆に、社会主義を陰影にして民主化に光をあてるために、作家プレブド

ルジ氏に最後の1人として加わっていただいた。彼が、民主化を支持すると表明して行動した4人の作家グループの、最後の生き残りだからである。

おそらく、民主化については今後まだまだ多くの歴史的証言を得ることができるだろう。しかし、社会主義を担った人びとについては、急いで言葉を集めなければ永遠に声が失われてしまう。現に私たちはもはや多くを失っている。

実は、撮影を企画する時点では、20世紀のモンゴルが生んだ傑出する女性歌手ノロブバンザトさん取材することになっていた。彼女の一生についてはすでに簡単にまとめて紹介したこともある。けれども、もし、彼女自身の声で、歌などまじえつつ、その言葉を集めることができれば、これまでの紹介とは比べるべくもない貴重な資料になるだろう、と思われた。そして、そんな私たちの願いはほとんど叶わなかった…。

本書でとりあげた4つの証言は、いずれも国立民族学博物館において映像作品を製作するために、ご本人たちの許可を得て撮影された。雑音などのために聞き苦しい箇所などを省略した、ほぼノーカットに近い長編4作と、社会主義化に関するビデオ番組3編が製作されている。本書における原稿はいずれも、このうち長編に記録された内容を文字化したものである。語り手のもつ魅力など映像作品を参照していただければ幸いである。

そもそも「20世紀とは何であったか」という問いは「21世紀はいかに生きるべきか」という問いと表裏一体の関係にあり、何もモンゴルにのみ通ずるものではない。詳細な解説をほどこすことよりも、まずはいち早く資料として公開し、こうした仕事の重要性をひろく訴えることが、本書の目的である。

本書に登場する4人は、この問いの物語における第1幕の主役たちである。まだまだ、現代を捉える異なる切り口の語り手はいらっしゃるであろうし、また同じ切り口でもさらに多くの方に登場していただく必要があるだろう。いくつもの幕場がありうる。私1人の力ではとてもこの1冊でさえまとめることができなかつたのであるから、より多くの同志を募るゆえんである。

最後に、企画当初の段階からずっと変わらず、惜しみない知的支援をしてくださったルハグワスレン氏（モンゴル文化基金事務局長）に衷心より謝意を表す。4人分すべてのテープ起こしをしていただいた。また、いつまでも着手しない私に代わって一気に翻訳を敢行してくださったのは藤井麻湖さん（ダムディン氏とプレブドルジ氏の分）と近藤正和さん（ミンジュール氏とゴンガードルジ氏の分）である。その見事な翻訳の力量がなければ、本書の意図は伝わらなかつただろう。ここにあらためて謝意を表す。ただし、用語統一や見出しなど日本語版とモンゴル語版を異なる監修者によって作業しているので、最終的な原稿としての責任はすべて監修者にある。

本書のためにご尽力くださったすべての方がたにお礼を申し上げる。